

平成 29 年 6 月 30 日現在

機関番号：37117
 研究種目：基盤研究(C) (一般)
 研究期間：2013～2016
 課題番号：25370065
 研究課題名(和文) ジャイナ教の教団分裂と異端説

研究課題名(英文) Eight heresies in Jainism

研究代表者

宇野 智行 (Uno, Tomoyuki)

筑紫女学園大学・文学部・教授

研究者番号：40331011

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：ジナバドラ(ca. 505-609)が著した白衣派聖典注釈文献『ヴィシェーシャーヴァシユヤカ・バーシャ』の「ニフナヴァ・ヴァーダ章」の読解をすすめ、ジャイナ教の教団分裂と異端論争の考察を試みた。ジナバドラは、異端追放の戒律の根拠や異端と判断する手順については何ら言及しない。彼は教団分裂についての歴史的経緯を記すよりも、哲学的論争に注力しており、ナヤ説(naya)を駆使して異端批判を展開する。「ニフナヴァ・ヴァーダ章」は、教団の歴史的記事を装った哲学的論争の記録と言えるのである。個別の論争の内容は下記を参照されたい。

研究成果の概要(英文)：We read the Nihnavavada chapter of the Visesavasyakabhasya, a Svetambara canonical exegesis attributed to Jinabhadra Gani Ksamaramana (ca. 505-609), conducting a study on the split of the Jaina religious order caused by eight heresies and the debates between heretical and orthodox schools. In the Nihnavavada, Jinabhadra mentions nothing about the mendicant law applied to the case of excommunication from their order and the procedure of making a judgment as to who is a heresy. He devoted his effort not to the description of how heresies were expelled from their order but to the defense of orthodox views through philosophical argumentation. The Nihnavavada is a record of philosophical disputes in Jinabhadra's era, which was intended to be a historical record of the Jaina mendicant order. On the contents of the disputes, see below.

研究分野：インド哲学

キーワード：ジャイナ教 異端 ニフナヴァ・ヴァーダ章 ガナダラ・ヴァーダ章 ジナバドラ

1. 研究開始当初の背景

仏教における教団分裂(破僧)については、経典・律文献・仏伝文学作品などの諸資料の研究により、その歴史的経緯、思想的争点、後代の評価について、かなりの研究の蓄積が為されて来た。一方、同じ沙門教団でありながら原典資料研究の乏しさのために、ジャイナ教の教団分裂史については包括的に研究されることはなかった。近代ジャイナ教研究における教団分裂研究は、ロイマン(Ernst Leumann)を嚆矢としている。ロイマンは『アーヴァシュヤカ・スートラ』に対する聖典注釈文献群に八回にわたる教団分裂記事が含まれていることを指摘し、これらの内容を初めて世に紹介した(“Die alten Berichte von den Schismen der Jaina.” *Indische Studien* XVII, 1885年)。ロイマン以降のヤコービ(*Sacred Books of East* 22, 45, 1884, 1895年)らの聖典翻訳研究は、ジナ伝および初期教団史の研究を飛躍的に発展させるが、教団分裂についてはロイマンの輝かしい業績を超えることはなかった。

近年の教団分裂研究では、その多くが中世以降のガッチャ分派の歴史研究に偏っている。古代教団分裂に関しても、第1分裂の主導者ジャマーリ、第8分裂(空白分裂)の主導者シヴァブーティに関わる小論が散見される程度であり、八つの教団分裂を包括的に取り扱った研究は管見では見出せない。

研究代表者は、博士課程前期進学以降、ジナバドラの哲学研究、主に『ヴィシエーシャ・アーヴァシュヤカ・パーシャ』に見られる他学派批判の内容を明らかにしてきた。一方で、その過程において、他学派批判という外部論争と教団内異端説批判という内部論争には多くの関連があることを痛感してきた。本研究は、ジャイナ教の異端論争を内部・外部の両面から包括的に考察しようとするものである。

2. 研究の目的

教団分裂と異端論争の詳細を明らかにするため、具体的には次の目的を設定した。

(1) 「ニフナヴァ・ヴァーダ章」の全訳

ジナバドラの『ヴィシエーシャ・アーヴァシュヤカ・パーシャ』「ニフナヴァ・ヴァーダ章」は、八分裂を最も詳細かつ豊富に記録し、後代の白衣派僧に多大な影響を与えたにも関わらず、ロイマン以降の研究においてあまりにも軽視され続けている。ジナバドラの著作とその副注文献群を全訳し、あらゆる文献類の対照を図る。

(2) 空白分派の歴史的考察と論争の解明

空衣派・白衣派の分派記事は、双方の資料においてかなりの隔りがあるが、双方の護教的態度を鑑みれば当然のことと言える。白衣派の言う第8分裂(シヴァブーティによる Bodiya 派)をそのまま空白分派と

捉えることは控えなければならないが、分裂論争の内容を第三者的な視点で提供すると思われる仏教資料(『長阿含』など)と比較し、分派の経緯を史実として解明する。

(3) 内部論争と外部論争の連関の解明

「ガナダラ・ヴァーダ章」の外部論争と「ニフナヴァ・ヴァーダ章」の内部論争には、論争の内容とその結果について相違が見られる。前者では対論者(11人のガナダラ)はすべて外教説を捨ててジャイナ教に帰依する結末を迎えるが、後者ではガッチャ追放や他学派創始(第6分裂のヴァイシエーシカ学派、第8分裂の空衣派)の例が見られる。論争の内容としては、前者が様々な根本原理(ジーヴァ、業、輪廻など)の存在論証そのものがテーマとなり、後者では存在のあり方(積極的多面説)や認識のあり方など、より微妙かつ詳細なテーマとなっている。これら両章の内容の相違を考察した上で、内外の論争を記録する目的を明らかにし、異端に対応するジャイナ教の態度を解明する。

(4) 仏教文献における記述との比較

仏教文献にもジャイナ教教団分裂記事が散見される。マハーヴィーラ在世時に起こったジャマーリとティシュヤグプタの二回の分裂と、仏教文献記事との比較を行い、この二回の分裂についての第三者から見た経緯、分裂理由、分裂の結果を明らかにする。

3. 研究の方法

上記の目的を達成するため、本研究では研究代表者以外に五人の研究協力者の協力を仰ぎ、次のような研究体制を組織した。

研究統括 (宇野)	ジナバドラ著作関連	小林久泰 川尻洋平
	聖典文献関連	河崎豊
	空衣派文献関連	藤永伸
	阿含経・パーリ律関連	中川正法

(1) 「ニフナヴァ・ヴァーダ章」読解

「ニフナヴァ・ヴァーダ章」には、仏教やヴァイシエーシカ学派などの他学派の見解が盛り込まれており、これらの読解作業には小林、川尻の参加を仰いだ。

(2) 関連文献電子化

「ニフナヴァ・ヴァーダ章」だけに限っても、注釈三作品、『ニルユクティ』に対する注釈群がブラークリット、サンスクリット両語に亘る。これらのテキストを相互検索の簡便性を確保できるよう、電子化を図った。

(3) 仏教文献読解

『ディーガ・ニカーヤ』「清浄経」および

『マッジマ・ニカーヤ』『周那経』など、ジャイナ教の分裂について記述した仏教文献を抽出、読解し、ジャイナ教の教団分裂記事と比較対照する。この作業には、中川の協力を仰ぐだけでなく、畑昌利氏（大阪大学非常勤職員）の協力も得た。

(4) 着衣問題の解明

空白分派の論争の中心として着衣の問題を律文献読解を通じて解明する。『オーガ・ニルユクティ』『ピンダ・ニルユクティ』『ブリハット・カルパ・バーシャ』などにおける教団分裂および不所有戒をめぐる論争を抽出し、読解する。特に、着衣問題とボーディヤ派 (Bodiya) の関連に着目し、白衣派側からの空白分派の捉え方を明らかにする。

(5) 「ガナダラ・ヴァーダ章」読解

「ニフナヴァ・ヴァーダ章」の読解をすすめる途上で、「ガナダラ・ヴァーダ章」との関連、論争の共通性がより一層明らかとなった。したがって、平成26年度よりこの作業を新たに加え、読解を継続した。特に「ガナダラ・ヴァーダ章」のうち、第1章：インドラブーティ、第2章：アグニブーティ、第3章：ヴァーユブーティ、第4章：ヴィアクタに現れる他学派との論争は、「ニフナヴァ・ヴァーダ章」とその論争法、論争トピックに共通性があり、これら4つの章を読解した。

4. 研究成果

(1) 「ニフナヴァ・ヴァーダ章」翻訳

「ニフナヴァ・ヴァーダ章」の翻訳については、第1章：ジャマーリ、第2章：ティシュヤグプタ、第4章：アシュヴァミトラ、第6章：ローハグプタ、第8章：シヴァブーティについては試訳は完成している。ただし、関連する『チュールニ』や「ガナダラ・ヴァーダ章」の読解に時間を取られ、多数ある注釈文献を読了するには至っていない。当初予定していた全体作業量の5割強の完了となった。

(2) テキスト電子化作業

「ニフナヴァ・ヴァーダ章」および注釈文献については、作業を完了した。教団分裂に関連する「ニフナヴァ・ヴァーダ章」以外文献は多岐にわたり、かつ分量も膨大であったため、電子化は直接論争に関わる部分だけに限定して行った。

(3) 新しい知見

本研究課題において、新たに明らかになった知見は以下のとおりである。

①第一分裂と考えられるジャマーリの争点は、行為実現の過程を認めるか否かという問題であるが、「ニフナヴァ・ヴァーダ章」では、これをより一層哲学的に考察する視

点が加えられている。著者ジナバドらは、「リジューストラ・ナヤ」の観点から見れば、「燃やされつつあるもの (dahyamāna) は燃やされた (dagdha)」という言明は誤りではない、と説く。すなわち聖典における現在分詞と過去分詞による同格表現は、「ナヤ」(観点)というジャイナ教特有の認識論により正当化されており、分裂記事を哲学的議論に昇華することが意図されている。このようなジャイナ教存在論を中心とした論議(ヴァーダ)の伝統を無視することは出来ないこと、またジナバドらが教団分裂の史実的な記述よりも哲学的議論を優先していることが明らかとなった。

②仏教パーリ聖典に見られるジャイナ教分裂記事の読解作業からは、パーリ聖典にはジャマーリやティシュヤグプタなどの分裂主導者たちの名称が一切現れないことが明らかとなった。『ディーガニカーヤ』『マッジマニカーヤ』などの聖典文献においては、単にニガンタの徒が分裂したことだけが理解可能であり、その事情についての記述は殆ど見られない。現在のところ、仏教文献が、ジャイナ教の教団分裂の原因、経緯、結果などについて具体的な証拠を提示しないことが明らかとなった。

③「ニフナヴァ・ヴァーダ章」第4章においては断滅論が主題となるが、その論争中に仏教説が現れ、いわゆる「相統」(santāna)説についての言及があることが明らかとなった。ジナバドらは、彼の在世時に流布していた仏教説を異端説と同類と看做し、より哲学的な論争記録に改変していることが窺われる。また、『ウツタラ・アディヤヤナ・ニルユクティ』に対する注『ヴリッティ』においては、いわゆる「滅不持因」に基づく論証が紹介されており、ジャイナ教の異端論争は内部論争を超えて拡大していることが明らかとなった。

④『バガヴァティー・スートラ』におけるジャマーリ記事に加えて、「ニフナヴァ・ヴァーダ章」では他の異端者の後日談記事が付加されている。例えば、第4章のアシュヴァミトラは教団追放の後、町の警備兵により泥棒扱いを受け、元のサンガに帰参して再出家する。第6章においては、異端者ローハグプタは宮廷論争に破れた後、師より灰の入った瓶を顔に投げつけられて教団追放され、六句義説をより推進してヴァイシェーシカ学派を創始する。このような後日談の増広は、当然のことながら「ニルユクティ→バーシャ→チュールニ→ヴリッティ」という注釈文献の変遷拡大に従っており、後代のヴリッティ文献類で最高潮に達する。ただし、いずれの文献においてもサンガ追放となる戒律的根拠や帰参についての手続きなどについては全て省略されている。

⑤ジナバドラはジーヴァ論の説明を起点として、刹那滅説批判や空思想批判を展開しており、これらの批判はジャイナ教の存在論および解脱論にまで及ぶ多量な論争記録となっている。「ガナダラ・ヴァーダ」第3章と「ニフナヴァ・ヴァーダ」第4章は、共に刹那滅説を批判しているが、その批判手法にはかなりの共通性が見られる。いずれの章においても、識相統説批判にはかなり注力しており、当時の唯識説批判の手法として貴重な資料であることが明らかとなった。また、「ニフナヴァ・ヴァーダ」第4章では、断滅論（刹那滅説）だけでなく絶対的恒常論も批判対象に加えられており、批判手法としてはナヤ説が用いられている。ジナバドラの存在論確立にとって、実体的ナヤと様態的ナヤというナヤ二分説はいわば「伝家の宝刀」として用いられていることが明らかとなった。

⑥「ガナダラ・ヴァーダ」第4章では、地・水・火・風という存在の確立に加え、ジナバドラ独自の不殺生論が展開されている。ジナバドラの不殺生論は、バドラーパーフの『オーガ・ニルユクティ』の思想を継承したものであり、生命に満ちた実在物に囲まれた中での沙門生活を正統化するものであることが明らかとなった。しかも、この沙門生活正当化の過程において、心理的殺生（bhāvahimsā）を重視する方法は、不所有戒と着衣についても当てはまる。白衣派の着衣正当化の論理は、不殺生論にも拡大され、心理的に不殺生（害意がない）ならば、殺生には相当しないとするのである。

⑦上記⑥の知見を得た際に、副次的に、植物（vanaspati）についての記述箇所を讀解し、ジナバドラが植物の精神性論証に対して初めて三支作法による論証式を提示していることが明らかとなった。聖典『アーチャーランガ』には人間と植物の類似性が説かれており、これが起点となって植物の精神性が主張されるようになる。『ニルユクティ』や『ヴァースデーヴァ・ヒンディー』はこの聖典記述を継承するが、未だ論証式提示には至らない。ジナバドラは、『ヴァースデーヴァ・ヒンディー』の記述を参考にして、「眠るから」「触れると収縮するから」「依拠する対象に沿って這うから」「異常嗜好（dohada）があるから」などの証因を提示する。各種『チュールニ』や後の独立作品はジナバドラの提示する論証式に大いに影響を受けており、ジナバドラこそが植物の精神性論証の方法論を確立した嚆矢であることが明らかとなった。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 3 件）

①宇野智行, 「ジナバドラのジーヴァ存在論証—ガナダラヴァーダ第一章和訳研究（2）—」, 『筑紫女学園大学研究紀要』, 査読無, 第12号, 2017, pp.1-13.

②宇野智行, 「飲酒の弊害：Aṣṭakaprakaraṇa 第19章翻訳研究」, 『奥田聖應先生頌寿記念インド学仏教学論集』, 査読無, 2014, pp.411-424.

③宇野智行, 「不殺生と不注意（pramāda）」, 『印度学仏教学研究』, 査読有, 第62巻第1号, 2013, pp.230-236.

〔学会発表〕（計 1 件）

①宇野智行, 「不殺生と不注意（pramāda）」, 日本印度学仏教学会第64回学術大会, 2013年8月31日, 島根県民会館.

〔図書〕（計 件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

宇野智行 (UNO TOMOYUKI)
筑紫女学園大学・文学部・教授
研究者番号：40331011

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者 ()

研究者番号：

(4) 研究協力者
藤永伸 (FUJINAGA SHIN)
都城工業高等専門学校・教授

河崎豊 (KAWASAKI YUTAKA)
東京大学・助教

中川正法 (NAKAGAWA MASANORI)
筑紫女学園大学・人間科学部・教授

小林久泰 (KOBAYASHI HISAYASU)
筑紫女学園大学・文学部・准教授

川尻洋平 (KAWAJIRI YOHEI)
筑紫女学園大学・人間文化研究所・リサーチ
アソシエイト